

その6 木の家具に学ぶ



写真上は、傷を守るため、杉のカウンターを亜麻仁油でコーティングする。京都市中京区・千本銘木商会。下は左から、兄弟そろいのタモの学習机(同上京区)と、店舗に積み上げられた古材(同伏見区・丸嘉)

木林学

中川 典子

見て触ってこだわり抜く

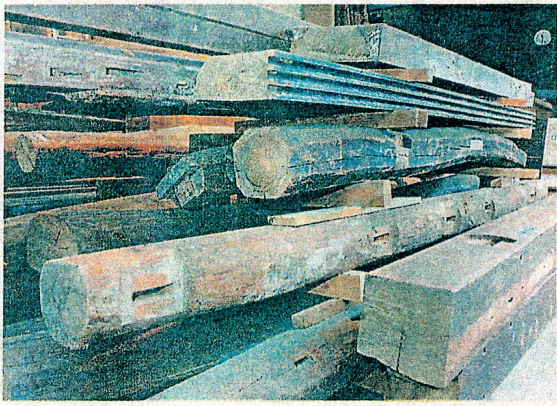
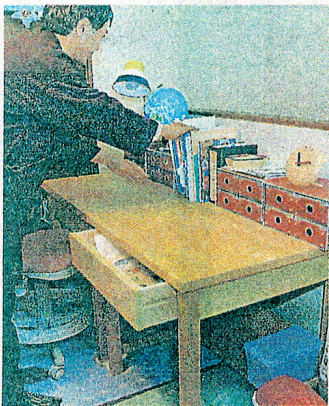
最近、木の家具を求める方の傾向が変わってきたように思います。新築マンションに住む中京区在住のNさんは、無機質な部屋に、何か自然のものが欲しくなりました。皮付き、幅の広い板などさまざまな結果、触った感じが一番温かく、節のある杉材にひかれ、引き出し付きカウンターを製作することになりました。

柔らかい杉材の家具には傷が付きやすいという弱点がありますが、日本で、それも奈良県吉野で何十年育った杉には、独特の存在感というのがあります。ひだしの前面の板の目を合わせることで、さらに美しくを演出します。長年使えるように、傷除けと水気を防ぐための亜麻仁油を仕上げに塗る、香り豊かな吉野杉のバワが体に入ってくるような、柔らかな仕上げになりました。

(49)は、息子、斐文くん(8)の小学校入学の際、松に対するアレルギーと建材や塗料などに敏感なことが心配になり、彼の体に負担のない学習机を探しました。

木の家具は、昔ながらの榿、柃、タモなどの広葉樹が主流でしたが、山が荒廃して広葉樹が激減しました。目新しい針葉樹家具への抵抗感が無く、国内に豊富にある杉や檜の存在が新たに注目され、針葉樹での製作が増えているのだと思います。物が豊かになり、使い捨てや安価なものなど、なんでもさう世の中であって木のある暮らしを選択する人がいます。自然との共存を考えるきっかけにもなりそう、うれしい出来事です。

(銘木業見習)



古材の活用 (味わい増し、再度の出番待つ)

近年、温暖化の影響もあって、日本の森林は劇的に荒廃しています。蓄積しているわけではありません。京都や滋賀の山々でも、本来は熱帯に住む虫たちによる侵食、台風や暖冬、手入れの悪さなどから、私の祖父の時代では考えられなかったほど、木の質が悪くなっています。

ならば、昔の木材は良かったと考えるのも当然。「もったいない」の風潮もあり、古材や木製の古家具を再利用して、自流にアレンジし、新しい家具や建築材料に使うことが増えてきました。一度は廃材となったものが、再び、新たな形で愛される家具や家になるのです。

昔、家を建てる際、使った木材の通し番号を書いた棟札や棟梁の名前などの書かれた梁、床の間に使われた、今では取れないような幅の広い板、製材機械のない時代に大きなノコギリで引き割ったような板。すべて年月を経た艶色の艶を帯びて、第二の人生を待っているようです。

このような木の活用を見る時、日常の暮らしの中でいかに無駄なく、効率よく、物を大切にすることが欠けているか思い知らされ、おおいに反省します。

皆さんも、しまいだんだん思い出の古家具やまた使える古材を、思い切った新しいものにチェンジする楽しみや、年月を経過してできた木の持つ魅力や、ぜひ味わってみたい。



毎月第1週に掲載します。

杉の家具と学習机は千本銘木商会<http://www.kyoto-suya.co.jp/> 古材は丸嘉の京都・古材市場<http://www.kozai-ichiba.com> リフォームの家具は丸嘉とタッチミー<http://www.me-touchme.com/>